

二〇三三年七月七日

縹渺と雲間ただやふ梅雨の月
脱稿となりて安堵のビール干す
ちらしずしオクラの星のトッピング
叶はぬと思ひつつ書く笹飾り
凌霄花をすだれと垂らす大和棟
分げつの進むかとする植田かな
吟行はしぼし中断氷菓食ぶ

二〇三三年七月六日

七夕の空へ吾はいま機上人
雨粒の数珠ときらめく蜘蛛囀かな
萍を乗せて溢るる梅雨田かな

二〇三三年七月五日

ポンポンと音を聞かせて西瓜売る
暦年の石の鳥居や木下闇
カリオンのごとく犇めく梅雨茸
蜘蛛の囀にな捕まりそ潜門
歩を合はせ夫に差し掛く日傘かな
青紫蘇を白磁の皿に堆く
畳踏む足裏にしかと梅雨湿り
ダム湖いま水満満として涼し
赤牛のごとき雲あり大夕焼
汗を拭きながら激辛カレー食ぶ
合歡の花バスに触れもす旅愉し

はく子
むべ
きよえ
たか子
明日香
千鶴
ぼんこ
あひる
もとこ
せいじ
よし子
ぼんこ
むべ
もとこ
みきえ
満天
たか子
せいじ
素秀
かえる
こすもす

二〇三三年七月四日

短冊にはみ出す文字や星祭
火口湖の外輪に立つ雲の峰
白南風や外輪船の機嫌良し
肩寄せて小さくてもよし白日傘
登山道部活女子らが駆けのぼる

二〇三三年七月三日

白砂に湿りの残る茅の輪かな
水鉄砲の二丁拳銃爺降参
髪あらふあしたは明日けふは今日

二〇三三年七月二日

教室を横切りるける黒揚羽
紙帯を解くや素麺ばさと散る
稜線の現れては消ゆる遠花火
ゆくりなく旧友と会ふ館涼し

二〇三三年七月一日

あめんぼう水輪を蹴つて進みけり
明易や幼鳥の声きこちなし

みきお
愛正
こすもす
はく子
せつ子
なつき
なつき
たか子
素秀
あひる
澄子
たか子
せつ子
むべ

毎日句会みのる選・二〇三三年七月九日